

## 平成27年度 秋田県総合政策審議会第3回観光・交通部会 議事要旨

1 日 時 平成27年9月28日(月)午後3時30分～午後5時15分

2 場 所 秋田県庁第二庁舎 31会議室

### 3 出席者

#### ◎ 観光・交通部会委員

佐藤 裕之	特定非営利活動法人トップスポーツコンソーシアム 秋田理事長
小国 輝也	株式会社菓子舗榮太楼代表取締役社長
打川 敦	社団法人横手市観光協会会長
池田 佳子	有限会社黒湯温泉代表取締役社長
水野 勇氣	秋田プロバスケットボールクラブ株式会社 代表取締役社長
渡邊 竜一	株式会社アジア・メディアプロモーション代表取締役

#### □ 県

前川 浩	観光文化スポーツ部長
保坂 龍弥	観光文化スポーツ部次長
草薨 作博	観光文化スポーツ部次長
齊藤 謙	観光文化スポーツ部次長
	他 部各課室長 等

### 4 観光文化スポーツ部部長挨拶

#### □ 前川部長

委員の皆様には、これまで多方面にわたって議論いただけてきた。

県としても、今年度は地方創生を実現するための総合戦略策定も行っており、これまでになく視点での取組の検討を行ってきた。

例えば、クールジャパン戦略に基づく県産品の輸出促進を明確に打ち出し、特産品のみならず伝統工芸品を含めた輸出拡大に取り組むこととしている。

また、外国人訪日客の拡大に伴って、ドラスティックに変化する訪日外国人の誘客についても具体的な取組に繋げてまいりたい。

当部は交流人口の拡大を主要なミッションとしており、観光のみならず食、文化、スポーツなどの多様な分野と連携した取組を行っていきたいと考えており、委員の皆様の多様な観点をとおした提言をいただきたいと考えているので、個々の取組についても深掘りした議論をいただきたい。

## 5 部会長あいさつ

### ● 佐藤部会長

今回が提言に向けた最後の専門部会となる。本部会では各論に迫った議論をしつつ、より高次の概念に統合していくような形で色々な議論を行ってきた。

今回の提言案は表現としては穏やかなものであるが、事務局にはそこにたった議論の過程を踏まえながら、今後の取組方針を検討して欲しい。

シルバーウィークに県内をまわったが、観光のあり方もだいぶ変わってきたように思う。先日太平山登山をした際には、県外の方が多く、関西の人や外国人もいた。私が話した県外の方は、日本100名山を踏破し、次の100名山の踏破を目指し日本を回っているのだという。

外国人旅行者のセカンドデスティネーションとして売り込んでいくということも議論に上がったが、シルバー世代にとっても、今まで訪れたことのない場所に訪れるという動きもあると思われるので、地域間競争でも勝てるように取り組んでいていただきたい。

また、クールジャパン戦略に基づいて、高質な田舎としての秋田を売り込んでいくということについては、かつて秋田は日本でもっとも上品な地域であったという話もあるため、そういったイメージの定着に向けて取り組んでいただきたい。イメージという点では、NEXT 5 も最近では外国人から注目されつつあり、ようやく軌道に乗ったという印象がある。

今年度最後の部会となるが、自由闊達な議論をしていただきたい。

## 6 議事

### ● 佐藤部会長

それでは、議事に入る。議事(1)観光・交通部会からの提言書の検討について、及び議事(2)道路ネットワーク整備に係る提言については、相互に関連があるので事務局から一括して説明をお願いします。

### □ 舩屋観光戦略課長

資料2の「平成27年度観光・交通部会提言書(案)」に基づいて説明を行う。

資料2をお開きいただきたい。提言案は大きく4つの提言から構成されている。

提言1「多様なニーズに対応する受入態勢づくりについて」であるが、一つ目として「旅行需要の拡大が見込まれる高齢者、障がい者、外国人個人旅行者等をターゲットとする『バリアフリースターセンター』の開設等により、多様なニーズに対応する受入態勢を構築すること。」

二つ目として「『道の駅』について、利用者ニーズの高い機能を整備するとともに、各駅の特性と個性を発信しながら、旅行者の目的地となる施設づくりを進めること。」を提言として掲げている。

具体的な取組方策としては、「バリアフリースターセンター」の開設等として

は、「様々な旅行者にとっての旅行に伴う不便や不安を解消することにより、拡大が見込まれる旅行需要への対応を図るため、『バリアフリースターセンター』を開設し、ウェブサイト等で旅のバリアに関するきめ細かな情報を提供するとともに、英語コンシェルジュや専門相談員を配置する。また、地域における受入態勢の充実と効果的なPRを担う、日本版DMOの設立を支援する。」こと。

「道の駅」の機能強化と魅力の向上としては、「Wi-Fi設置などの施設整備を進めるとともに、営業時間の延長など運営面の改善を図ることにより、『道の駅』としての機能を強化し利便性を向上させる。また、地域の運営主体が行う、各駅の立地や特徴に応じた魅力ある施設づくりを支援する。」こととしている。

提言2の「ネットワークを活用したPRについて」であるが、一つ目として「県外からの誘客においては、県出身者のネットワークを活用するとともに、『高質な田舎』に魅力を感じるお客様へ、SNS等の活用により直接的にアプローチすること。」

二つ目として「海外からの誘客においては、特に台湾やタイを中心とした東アジアにターゲットを絞り、本県がセカンドデスティネーションとして選ばれることを意識したプロモーションを集中的に実施すること。」

三つ目として「県産食品の販路拡大においては、本県ゆかりの事業者と連携した取組を強化するとともに、海外マーケットへの売り込みについては、国が主導する『クールジャパン』施策と連携するなど積極的な展開を行い、新たな展望を切り拓くこと。」を提言として掲げている。

具体的な取組方策としては、県出身者のネットワークの活用としては、「郷土愛があり、自分たちを活用してほしいと思っている本県ゆかりの人材から『高質な田舎』を発信していただくことにより、県外からの誘客を推進するため、県人会組織や『秋田の応援団』を活用したPRを行う。」こと。

SNSやパブリシティの活用としては、「コンテンツを磨き上げつつ、国内外において影響力のあるブロガーやライターを活用し、SNSやパブリシティにおける露出を図る。特に海外からの誘客については、現地の人の利用頻度が高いウェブサイト等に対して、外国人目線による質の高い情報掲載を集中的に行うなど、より効果的な情報発信を図る。」こと。

海外への集中的なプロモーションとしては、「FITやハラルなどへの対応を適切に行いながら、例えば農家民宿への教育旅行の受入など、ターゲットを絞ったプロモーションを集中的に実施する。プロモーションの実施にあたっては、国際教養大学が有する豊富な知見やネットワークを活用し、また同大への留学生をマーケティングや現地への情報発信に活用するなど、本県の強みを生かした取組を行う。」こと。

本県ゆかりの事業者との連携としては、「県産食品の販路を拡大するため、本県ゆかりの店舗を情報発信チャネルや流通チャネルの一つとしてネットワーク化するとともに、消費地におけるマーケティングの場として捉え、県産品の提供

や本県のPRが出来る仕組みを構築することにより、誘客を含めた拠点として活用する。」こと。

『クールジャパン』への取組としては、「国が主導する、海外における和食のフードコート展開や様々なコンテンツの発信等の『クールジャパン』の動きに呼応し、県産品の海外輸出を中心に、インバウンドもからめた積極的な仕掛けを行う。」こととしている。

提言3の「文化とスポーツによる地域の元気創出について」であるが、一つ目として「祭りや伝統芸能の観光客への開放と、『日本遺産』等の制度の活用により、本県ならではの文化資源を生かした地域づくりを進め交流人口の拡大を図ること。」

二つ目として「2020東京オリンピック・パラリンピックに向けて、大規模な国内・国際スポーツ大会や合宿の誘致を進めるとともに、きめ細やかな受入態勢を構築することで、本県への旅の満足度向上につなげること。」を提言として掲げている。

具体的な取組方策としては、文化や伝統の新たな観光資源への磨き上げとしては、「祭りや伝統芸能について、由来や本来の姿を尊重しつつも、観光客向けの催事として可能な範囲で開放するよう促す。また、地域に伝わる歴史的な文化や伝統等の資源を、『日本遺産』等の制度を活用しつつ、それぞれの特長を生かしながら地域と一緒に磨き上げを行う。これらを通じて、地域の元気創出を図る。」こと。

大規模スポーツ大会等の際の「おもてなし」としては、「大規模スポーツ大会や合宿などで本県を訪れる選手やファン等が、満足を得てリピーターとなるよう、きめ細やかな受入態勢の構築と現地対応を行う。」こととしている。

提言4の「県内外との交流を活性化させる交通網の整備について」であるが、一つ目の道路交通ネットワークの整備については、今回の部会の中で議論を深めていただきたいので、現状では空欄としている。

二つ目としては、「三セク鉄道について、鉄道ファンに訴求する大胆な魅力づくりに取り組むこと。」を提言として掲げている。

その具体的な取組方策としては、三セク鉄道の魅力向上としては、「中途半端ではないこだわりのコンテンツを乗せた車両の運行や、鉄道ファンの名誉駅長への委嘱など、熱烈な鉄道ファンを取り込む魅力づくりを積極的に行う。」こととしている。

事務局からの説明は以上である。

## □ 佐藤道路課長

続いて道路課からの説明を行う。資料3をご覧いただきたい。

資料3では県内外との交流を活発化させる交通網の整備について、現状をご説明した上で最近のトピックを紹介してまいりたい。

高速道路ネットワークの早期完成については、現在計画延長362kmのうち、供用延長が302.5kmで供用率84%、事業区間が54.8kmで15%、未着手区間が4kmで1%となっている。県内高速道路の早期全線開通に向け、日本海沿岸東北自動車道や東北中央自動車道の計画的な整備に向け、手を緩めることなく整備してまいりたい。

また、高速道路を補完する幹線道路ネットワークの形成については、高速道路と一体となって地域間の交流を図る地域高規格道路について、整備に向けた取組を強化していく。

昨年度、有識者で構成される「秋田県幹線道路検討委員会」を設置し、地域経済の発展や、県民の安全・安心の観点から優先整備「路線」と「区間」を決定したところ、地域高規格道路「大曲鷹巣道路」の「大覚野峠工区」を優先整備区間として決定し、その事業着手に向けた調査を進めるとともに、国への働きかけをしていくこととしている。

さらにトピック的な話題提供として、資料内で、高速道のガソリンスタンドに空白区間が多いという記事を掲載している。秋田県内には、サービスエリアはあるもののガソリンスタンドがない状況で、県内のみならず全国でも問題となっている。

次のトピックとしては、高速道路の暫定2車線を4車線化にする際、これまでは国土開発幹線自動車建設会議という非常にハードルの高い会議を開催することが求められていたが、今後は有識者による第三者委員会の審査により拡幅を決定する仕組みに改めることとしている。

事務局からの説明は以上である。

## ● 佐藤部会長

ただいま、議事の1及び2について説明いただいたが、これまで議題になっていなかった(2)道路ネットワーク整備にかかる提言について、先に議論いただく。

前回の部会では道の駅の活用について報告もあったが、ご意見アイデアをいただきたい。

## ◎ 水野委員

ハピネッツがアウェーでの試合がある場合、首都圏以外はバスを利用している。その経験からすると、二ツ井から大館の高速道路が結ばれると移動時間の短縮が期待できるし、金浦以南の山形にも早くつながって欲しいと感じている。

## ◎ 打川委員

県外との接続で言うと、横手・北上間では片側一車線の対面通行になっている部分があり、冬期間等に国道107号が通行止めになり、高速道路も事故などで通行止めになった場合、仙台方面から孤立してしまう。

こういったリスクがあるため、秋田港を活用しきれていないのではないかと。現状では産業道路とは言えないので、道路の規格を上げて欲しい。

## ◎ 小国委員

シルバーウィークに、京都の友人が自家用車で13時間かけて秋田に来た。新潟まではスムーズに来られたものの、そこから先は高速道路を上ったり降りたりを繰り返して、非常に大変だったと言っていた。

秋田県民は、新潟が遠い山形が遠いというが、逆に言えば新潟や山形から秋田県が遠いということである。

東北自動車道が日本の背骨になっているが、環日本海の円滑な交通網の構築のためには、新潟・秋田間の接続は大切であり、現状のぶつ切りになっている状態は円滑な移動の妨げになる。

現在では、大曲鷹巣道路の大覚野峠工区が優先整備区間となっている。生活道路が必要ないということではないが、観光に関する部会としては、東北縦貫道との接続を良くすることにより誘客拡大に取り組むべき、という提言も出来るのではないかと。

一方で、入ってきやすくなるということは通り抜けやすくなるということもあるので、観光コンテンツの磨き上げも必要である。

## ● 佐藤部会長

商工会議所で高速道路整備促進大会を行っているが、毎年同じ議論で、決起集会としてマンネリ化している面がある。打川委員から産業道路としてのあり方について発言があったが、シーアンドレール構想が進まなかった理由として、秋田自動車道が1車線であったこと、秋田港の岸壁が貧弱であったこと、シベリア鉄道が揺れるので精密機器が輸送できないことの3つがネックであった。

以前鶴岡の加茂水族館に行ったのだが、駐車場にある県外ナンバーはほとんどが新潟以西の車で、秋田県ナンバーの車がほとんどなかった。これも道路の接続の問題があるのではないかと。

道の駅に関しては、国交省はサービスエリアを防災の拠点にするという動きもあるが、秋田自動車道や日沿道にはサービスエリアが少なく、ガソリンスタンドもない。日沿道を下りて象潟を超えたところに一カ所ぼつんとあるだけであり、利用者にとっては危ない状況にある。例えば、ガス欠になりそうだったら電話してガソリンを配達するようなサービスを行うことも検討できるのではないかと。

また、県内の各地で文化イベントがあっても、ドイツのように高速道路を使って各地に出向いていくということは一般的ではないし、自家用車で行けばアルコールを楽しむことが出来ない。そのため、角館と増田を結ぶバスのような小ぶりのチャーターバスで周遊させるような取組も出来るのではないかと。

高速道路については、国土交通省の所管ではあるが、サービスエリアの設置場

所は西仙北でいいのかと思う。高速道路を活用して観光のツールにするのであれば、横手にサービスエリアを設置することも検討できないだろうか。全国的にはサービスエリアが道の駅のように観光の目的地になっている面もあるが、そういった動きに対応した対策も必要だと思う。

#### ◎ 渡邊委員

隣県との連携という観点からすれば、東北観光推進機構が打ち出している「東北奥の院」の広域観光周遊ルートのイメージに基づいた戦略も必要ではないか。首都圏では秋田の紅葉ではなく、東北の紅葉としてPRされている。

日本の高速交通道路網である東北自動車道に秋田がつながっていることを、いかに外国人に周知していくかが重要である。どこが切れているかよりも、どこがつながっているかを見えるようにすることで、誘客拡大に取り組むという視点が必要である。

また、観光を軸に道路を考えていく場合、今後観光バスが増えていく中で、いかにスムーズにすれ違えることができるか、駐車場の問題をどうするかといった部分を踏まえて、規格などを考えていくべきである。

#### □ 佐藤道路課長

サービスエリアについては、県としても、給油所を含めたバランスよい配置を国に要望しているところである。

#### ● 佐藤部会長

要望先は国になるのか。

#### □ 佐藤道路課長

まずは国に対して要望すべきであると考えている。

#### ● 佐藤部会長

NEXCOに対して要望する方法もあるのではないか。

#### □ 佐藤道路課長

高速道路は国の許認可もあるので、まずは国への働きかけが必要と考えている。

#### ● 佐藤部会長

民間の感覚からすると、NEXCOも積極的に取り組んでいる。

東北自動車道から秋田に来ても、錦秋湖サービスエリアより先では買い物できる場所がほとんどない。

## ◎ 打川委員

愛知や神奈川では、高速道路の利用者と地元住民が複合利用できるような施設整備をしているようだ。例えば、横手ふるさと村にも高速道路利用者を引き込む方法があると思うが、どうか。

## ◎ 池田委員

当宿のお客様は、宿泊した翌日に盛岡に行ってしまうことが多く、非常にもったいないと思う。高速道路は無理にしても、田沢湖、角館、秋田及び男鹿とつながるような観光道路が一本あれば非常に利便性が高まり、秋田での滞在日数も増えると思う。

## □ 保坂次長

道路が出来ても、誘客出来るコンテンツがあるのかどうか問題である。

予算取りするときには、どうやって優先順位をつけるかが重要であり、生活路線という部分も含めつつ観光にも資する道路であるということで、働きかけてまいりたい。

## ● 佐藤部会長

十文字の道の駅は秋田で最も集客力がある道の駅である。荒唐無稽かもしれないが、ここに県外の方を誘客するため、県外ナンバーの車は十文字道の駅に寄れば、横手十文字間の高速道路料金が無料になったり、割引になったりするようなサービスを展開できないだろうか。

サービスエリアをハード的に整備できないのであれば、既存の道の駅などにサービスエリア的な機能を付加することも出来るのではないか。

日沿道の象潟延伸に伴って、道の駅象潟が、危機感を持って利用者の取り込みを検討しているようだ。あそこは無料区間であるため、気軽に降りてくることも考えられるが、有料区間で途中下車してもらうには相当の工夫が必要である。

このことについて、ヒントを得たのは秋田空港で行っている1,500円で2,000円の商品券を配布している事業だ。このような取組を高速道路と連携して実施できるのではないか。

## □ 保坂次長

隣県との連携であれば、山形県の庄内地方との連携を行っているが、道の駅にどのように遠回りしてもらうかという観点での取組はおもしろいと思う。

## ● 佐藤部会長

キャッシュが戻るとか割引があるとか、そういった消費者に直接的に訴えかける仕掛けがあるとおもしろいと思う。

◎ 打川委員

NEXCOでも様々な周遊割引企画があるが、もっと地域性の強い企画があっても良いと思う。複雑な経路でもETCを活用すればルートを確定できるので、企画を持ちかけることも検討してはどうか。

◎ 渡邊委員

県外からの流入を考えた際に、例えば東京からスキーツアーで地方のスキー場へ移動する際には、高速を使わず、一般道で移動することが多い。その際には、必ずと言っていいほど立ち寄りポイントがある。これは観光スポットがバス会社と提携して立ち寄り地点になるように働きかけているためと思われるが、このようにバス会社とのセットにしたプランを提供すれば利用促進につながる。ツアー会社と組むという方法もあると思う。

□ 前川部長

十文字の道の駅を軸とした提言をいただいているが、本県において重要だと思うのは、民間側が具体的な企画を考案し、それを行政がバックアップするという関係性をどう構築していくかという点であると思う。秋田県の場合は特に民間からの仕掛けがもっと活発になると良いと思う。

● 佐藤部会長

そういった面では、十文字の道の駅は非常にやる気があり、企画も期待できるのではないか。

□ 前川部長

十文字の道の駅は秋田市にも出張販売をするなど、市街に打って出て勝負しているので、十文字の道の駅と共に仕掛けていく価値はあると思う。

◎ 打川委員

十文字の道の駅は週末混み合い、駐車スペースがないので、売り上げを伸ばすには外に打って出るしかないという事情もある。

□ 草薨次長

夜中のバスツアーの連携については、立ち寄り地点となることにより夜中も店を開けることで、かえってコスト高となるという懸念はないだろうか。

● 佐藤部会長

現状では夜中のバスツアーというのもそれほどないと思うので、営業時間内での対応でよいのではないか。

◎ 小国委員

私は盛岡に行くときには高速道路は使わずに一般道で向かうのだが、46号線が寂しくなっている。

例えば、田沢湖を一周したら何かをプレゼントするというような、周遊を促進するような企画ができないものか。

● 佐藤部会長

民間企業が提言できる入り口があるとよい。協和の道の駅にも一定の人は入っているだろうが、県内の方は広域農道を使うので、立ち寄り地点になりにくい面もある。

大曲の花火では、渋滞を緩和するために迂回路の看板を46号線沿いに設置しているようだが、この設置者は誰か。

□ 佐藤道路課長

国交省、県、地元自治体が連携して渋滞対策協議会を設置し、渋滞の迂回路の案内を設置している。

● 佐藤部会長

あのような気の利いた看板を気軽に設置できるように出来ないものか。

◎ 池田委員

お客様から道が分かりにくいという声もあるため、道路沿いにわかりやすい看板があるとありがたい。

□ 保坂次長

以前農道の建設をしていた立場からすると、会計検査が終われば規格を変更することが出来るが、それまでは国の基準に沿ったものとせざるをえない。

花火の関係でいうと、大曲商工会議所は会頭をはじめ、すごくやる気があり、民間主体でがんばっているところなので注目している。

● 佐藤部会長

道路標識の規制緩和みたいなものが進むと、高規格道路と一般の道路をつなぎ、道の駅をサービスエリア的に利用することが可能になるのでないか。

□ 前川部長

岩手県側は通常の標識の下に県が独自に標識をつけている。どのような仕組みでやっているかはわからないが、行政の立場で個別の施設の案内は無理にせよ、乳頭温泉郷や田沢湖高原の案内標識の作り方は工夫すればできるかもしれない。

● 佐藤部会長

やれるルートはあると思うので工夫して欲しい。

大間でまちづくり伝道師を行っている島康子という人物は、毎日フェリー入港者に対して大漁旗を降って出迎えをしているのだが、これの道路版ができないものかとも考えている。

道路ネットワークの整備にかかる提言について、他になれば、(1)観光・交通部会からの提言書の検討について議論いただく。

◎ 渡邊委員

バリアフリーツアーセンターについて、国土交通省もユニバーサルツーリズムを推進しているので、事業の連携を検討すべきではないか。似通ったことをやると思うので、何らかの規格があるのであれば、同一の規格で整備すればロスがなくて済む。

● 佐藤部会長

バリアフリーツアーセンターの名称は決まっているのか。

□ 石黒秋田県観光連盟専務

国が進めているユニバーサルツーリズムの一環としてのバリアフリーツアーセンターには観光連盟としても加入する予定である。

名称については、外国人対応もできるという面がバリアフリーという言葉だけでは伝わりにくいので、「あきた旅のサポートセンター」という名前を併用することを予定している。

◎ 池田委員

バリアフリーにも色々な意味がある。当宿でも英語である程度コミュニケーションをとるように従業員が勉強しており、館内の案内ぐらいは出来るようにしたいと思う。

国際教養大学の学生や留学生に来ていただいて、案内の仕方などを指導いただければありがたい。

● 佐藤部会長

提言1の多様なニーズに対応する受入態勢づくりにおけるDMOと提言3の文化とスポーツによる地域の元気創出に関連して、以前スポーツコミッション、フィルムコミッションをもつべきと提案したが、域外の方々に営業し、連れてきて、もてなすという観点ではDMOもコミッションも機能としては似ているように思う。DMOに大きなコミッション機能をもたせ、外国人誘客担当、スポーツ

担当といった部会制にし、官と民の間の組織として取り組んでいくと実効性が高い取組になると思う。

#### □ 前川部長

日本版DMOがどこまでの機能を果たすのか、連携のレベルを全県レベルにするのか地域レベルにするのかで整理の仕方が異なると思う。

単独の市町村単位でDMOを持つのは無理なので、地域単位で先行してモデル地区を整備する方法がよいと考えている。

仮に、県全域でDMOを置くとすれば、スポーツや文化という分野別の取組を併せて行うことが可能であると思う。

#### ◎ 小国委員

県や連盟の中にサポートセンターができたとしても、一カ所だけでは使いにくいので、田沢湖や男鹿など全県に5カ所くらいDMOの支局のようなものを設置し、色々なお客様に満足していただける取組をすべきではないか。

男鹿は旅館組合が頑張っている。以前男鹿を訪れた際に、短期間しか滞在できなかったため、旅館従業員にお勧めのルートを聞いたところ、ニーズに合致した見所を教えてくれた。このような旅館従業員のインフォメーションを、ネットワークで広げていくべきではないか。

#### ● 佐藤部会長

2のネットワークを活用したPRについてはどうか。

#### ◎ 打川委員

SNSのネットワークの中には大きいグループもあり、そのようなグループへの投げ込みは大きな効果がある。

観光協会などの職員も兼任で投稿するのではなく、専任で発信するくらいの価値があるものと考えている。

#### ◎ 渡邊委員

提言の中で、セカンドデステーションとして選ばれることを意識したプロモーションとあるが、ここではゴールデンルートなどの多くの外国人が訪れる地域との連携、という部分を明確に位置づけていただきたいと思う。

#### □ 前川部長

台湾については、定期便化に向け取り組もうとしているところであるが、一番ネックになるのが、海外で東北の夏祭りをPRしてもそもそも外国人が泊まれないため、インバウンドを伸ばすことができない、という問題である。

現在、あるホテルと、夏祭り期間中に外国人観光客向けの部屋を確保することを相談している。同じく夏祭りのある青森とも連携しながら取り組もうとしているところである。

台湾については、定期便化に向け、計画的に取り組んでまいりたい。

また、タイでは、秋田県出身の方が現地の旅行会社を経営しているが、現地では、教育旅行と農家民宿に秋田の魅力を感じているので、このようなコンテンツの磨き上げをしつつ誘客に取り組んでまいりたい。

秋田の魅力をアピールするコンテンツとして、もう少し力を入れられるのではないかと感じているのが「雪」である。

雪を活用した誘客では北海道が成功しているが、雪と言えば「かまくら」のような打ち出し方が出来ないかと思案しているところである。

台湾とタイについては、人的なコネクションを繋げつつ、いわゆるフィクサー以外の実務担当レベルの人材との連携も進めながら、力強くプロモーションを行い、成果につなげてまいりたい。

## ◎ 水野委員

県出身者のネットワークについて、県人会は今の時代にそぐわない面もあるのではないかと。当社もハピネットの立ち上げ時に連携できないか模索したが、県人会の参加者はリタイヤしている方がほとんどで、20代から50代の秋田出身者へのアプローチができなかった。そこに対してもアプローチするのであれば、別の方法が必要で、今ならFacebookによる呼びかけなどが効果的だ。

## □ 前川部長

世代別に有効なアプローチの仕方があるという点ではまさにその通りで、県人会はリタイヤした方々が多いため、国民文化祭においては、文化活動の良き理解者として支援していただいた経緯がある。

一方で、県人会には若い人が少ないという課題も事実であり、若い人が集まるグループへのアプローチが必要な施策があるのも確かである。

## ● 佐藤部会長

経験上、ある程度の年齢になって里心が芽生えることがある。現役世代より、リタイヤした世代の方が、秋田のために一肌脱ぎたいとがんばってくれる。例えば秋田版C C R Cで協力していただくなど、様々な面で協力いただく場面もあるだろう。

## ◎ 水野委員

県人会を活用した取組に意味がないと言っている訳ではなく、旅行需要の旺盛な人たちへのアプローチを考えるべき、という趣旨である。

## □ 保坂次長

県内各高校の同窓会組織は強力なものがあり、東京でも活発に活動をしている。若いOB・OGも含めた取組を強化してまいりたい。

## ● 佐藤部会長

秋田県の同窓会は、若い人の勧誘が弱いようだ。

関連になるが、ここで書かれている連携相手は一般名詞で記載されているが、固有名詞でどれだけ多くの人を掴めるかが重要であると思う。

## □ 前川部長

ブロガーならパワーブロガーを個別にピックアップして活用するなど、情報発信に長けた方との協力体制を構築している。

情報発信で言うと、国際教養大学や秋田大学の学生たちから情報発信をしてもらう仕組みを作れないかと考えている。

水野委員にお聞きしたいのだが、例えば秋田にいる台湾、タイの人たちがチームをつくり、その人たちに発信してもらうことを想定しているのだが、例えば国際教養大学の学生にそういったことをしてもらおうとしても、忙しくてそこまで手が回らないものなのだろうか。

## ◎ 水野委員

留学で一年間いなくなってしまうため、連携体制が途切れてしまうというのが最大のネックとなる。

## ● 佐藤部会長

学生はまだ学生なので、実はネットワークは大きくない。むしろ、留学生に対して秋田の知識を刷り込むのが良いのではないだろうか。

## ◎ 打川委員

横手市では台湾の大学生を3週間招いて研修しているが、好評で、自らSNSを活用した情報発信も行っている。

## ◎ 水野委員

謝礼はどうしているのか。

## ◎ 打川委員

旅費だけを市が負担している。今年の冬も同様の取組を行う。

最近注目しているのが、フォートラベルというサイト。投稿者の旅行記を他の

人が追体験できるサイトで、人気が高まっている。ベストセラー旅行記になると商品券をプレゼントされることが、投稿者にとってのインセンティブとなっているようだ。

#### ◎ 水野委員

留学生に対しては、ブログを書くことで授業料が減免されたり、報酬が出たりするなどのインセンティブがあると、情報発信をしてくれるかもしれない。

#### ◎ 打川委員

以前、上海に10分で炊けるあきたこまちを持っていった。中国へは一次産品の輸出は難しいが、これは加工品だから輸出できるとのことであった。10分で普通のお米と遜色なく炊けるものだが、これも県の研究支援で作ったものなのか。

#### □ 草薙次長

米は、加工品にすることで中国へ輸出することが出来る。技術支援したものなのかどうかは、調べてみる。

#### ● 佐藤部会長

本県ゆかりの事業者に関連して、国外で活躍している秋田県出身者が結構いる。海外で活躍している秋田県関係者を見つけて大使をしてもらうなどの取組も出来ないだろうか。

クールジャパンへの取組については、県産品の中には伝統工芸も入るのだろうか。後継者がいなくなって廃れた秋田黄八丈などが次に絶対ブームになると思う。

#### □ 前川部長

クールジャパンで売り出す県産品の中には、もともと伝統芸能が入っている。クールジャパン戦略の中で一層売り込んでまいりたい。

#### ● 佐藤部会長

他に提言3についてはどうか。

#### ◎ 水野委員

スポーツ振興に関して、秋田県スポーツ推進審議会とこちらの部会とどちらに提言すべきか悩むのだが、地域の元気創出にプロスポーツチームのことを関連づけてもらいたい。

欧米ではスポーツは地域の財産という共通認識があり、例えばアメリカの4大スポーツチームのある地域は価値ある地域という認識が浸透している。

日本でもJリーグのおかげでそういう概念がでてきたが、その他のスポーツで

も地元プロチームがあるということの価値をもっと全面に打ち出して欲しい。

### ● 佐藤部会長

スポーツのNPOに関わっている立場からすると、今後のスポーツツーリズムは、まちおこしという観点からすると、全国的な或いは世界的なメッカを目指すスポーツがあっても良いと思う。ラグビー王国秋田だから、秋田にくるとラグビーの文化があって、ナショナルワイドな競技大会が開かれている、というような地域にすることで、誘客を図るといった側面もあると思う。

競技のメッカという観点からすれば、スポーツYUKIYOSEは、どこで展開しても本拠地は秋田だというような、メッカとしての地位を確立できるのではないか。

### □ 齊藤次長

スポーツYUKIYOSEは取組として良いと思う。

人を引き込む観点からすれば、そのスポーツ自体が強いということだけでなく、地域のファンが熱狂的であることが、その地域をメッカたらしめると思う。

### ● 佐藤部会長

スポーツ応援団は自治体行政とのつながりが少ないと思う。例えば、サポーターが出発するときに応援するようなあり方があっても良いと思う。

### □ 前川部長

そういう点では、ハピネットのファイナルズでは、知事がブースターと共に有明に行くなど、スポーツを応援する姿勢があると認識している。

水野委員の意見として、プロスポーツの位置づけを明確にすべきだというご意見があったが、バスケット、サッカー、ラグビーの3つのプロスポーツを中心に地域の元気創出に向けてがんばっている人がいて、100%十分ではないかもしれないが、県としても支援してきている。県としても、そのプロスポーツチームの価値を認めているからに他ならない。提言の中に書くか書かないかは別として、プロスポーツの取組は、県としても評価している。

### ◎ 打川委員

10月に日本の祭りが開催されるが、その関係で地域活性化センターの方に秋田に対する印象をインタビューしたところ、地域伝統芸能がたくさんあって、文化度が高いとのコメントをいただいたが、もっともである。

そこで、提言書においては、「日本遺産」だけではなく、「秋田遺産」というものがあっても良いと思うが、どうか。

## □ 保坂次長

遺産という関係では、先に大仙市が花火シンポジウムに参加したが、花火はまさに世界に誇る遺産となり得るということも話題となった。

## ◎ 池田委員

先日、本県の記事をウィークエンダーに掲載したが、結構お金がかかる。大曲の花火は世界に誇る文化であるため、海外に発信するためにお力をお貸しいただければ、注目度が高まるのではないかと

## □ 前川部長

知事はクルーズ船が帰るときに花火をあげるのが秋田としてのおもてなしではないかと話したことがあり、先立つものが必要だが秋田らしいおもてなしになることは確かである。

どこまでできるかは予算上の制約もあるが、秋田や日本の誇る文化である花火と絡ませながら誘客するという手法は、あると思う。

## ● 佐藤部会長

大仙市の花火製造事業者で最も収入を上げているのは、ディズニーランドに花火を卸している会社とのことだ。毎晩花火が上がる街ということになれば、新たな雇用も生まれるのではないかと

## □ 保坂次長

大曲の花火の凄いところは、自ら協賛金を集め、県や大仙市には強力な支援体制を求めているところである。

## ◎ 小国委員

本県のイメージアップには、あきたびじょん室をはじめとして頑張っているが、なまはげをモチーフとしたゆるキャラも今度登場するとのことだ。

確かに、秋田はなまはげというイメージがあり、一定の効果が期待できるものの、スギッチはスギッチなりの良さもある。ころころとキャンペーンやゆるキャラを新たに打ち出すと、仕事しているような気にはなるが、県外の方々にはなかなか定着しない。

火の国熊本や紅花山形のように、一発で伝わるようになるまで継続的に行うべきではないかと

## ● 佐藤部会長

「そうだ京都に行こう」が定着したが、それくらいを目指さないといけない。

● 佐藤部会長

まだまだ意見もあると思うが、予定の時刻になったので、これで議事に関する意見交換を終了させていただく。事務局には、本日までの意見を、しっかりと提言にまとめていただきたい。

7 閉会

□ 前川部長

我々が仕事をしていく中で一番大事なことは、出された意見をしっかりと聞くことである。提言に盛り込まれないものであっても、委員の皆様の意見を受け止めていくことが大事だと思っている。

部会としては、今回が今年度最後の部会となるが、今後ともそれぞれの立場で声を届けていただければと思う。

―― 議事終了 ――